

難波西鶴と



[72]

森田 雅也

西鶴の『日本永代蔵』(貞享5(1688)年刊)巻三の二「国に移して風呂釜の大臣」の副題は「豊後かくれなきまねの長者」は悲惨な没落話でした。

しかし、それもこれも京都文化にあこがれる気持ちから起きたカルチャー・ショックが原因と言えるでしょう。

『西鶴諸国ばなし』(貞享2(1685)年刊)巻一の四「傘の御託宣」の場合、和歌山城下の「掛作の観音」にあった1本の「傘」が、「神風」に吹き飛ばされて、(肥後)熊本(語譯刊)『貞享3(1688)年刊』巻一の二「絶岸の奥山の里まで飛ばされて」

和尚肥後にて轆轤首を見結ふ事」でも、肥後の山奥に「ろくろ首」の一族が住んでいたとすると、カルチャー・ショックの設定場所として、ふさわしいイメージだったのでしようね。

そういったところ、この地域の人が傘というものを見知らず、村里あげて大騒動になったことを記しています。「傘を知らない地域が九州の肥後にあった」というカルチャー・ショック話は、うそでも、大げさすぎる話でもなく、当時、傘は都市部を中心に普及し始めたところ、まだまだ、地方の農村部の雨の日は蓑笠や、手ぬぐいでの頬被りが中心でした。

『西鶴諸国ばなし』(貞享2(1685)年刊)巻一の四「傘の御託宣」のら、より確実に傘を知らな

い村がありそくに思えるのです。同時代の山岡元隣『百物語語譯刊』(貞享3(1688)年刊)巻一の二「絶岸の奥山の里まで飛ばされて」

実際は文化の開けた土地

えた神屋宗湛(1553-1635)・島井宗室(1599-1615)以降は、大商人を輩出しませんでした。その原因は日本の経済政策が、鎖国による国内貿易に限ったため、海外貿易が得意な博多商人の特性が生かされなくなったことが考えられます。

近松門左衛門の浄瑠璃「博多小女郎波枕」(享保3(1718)年11月大坂・竹本座初演)は長崎に実際にあった密貿易団事件を扱った有名となりましたが、博多の遊女小女郎が筋に絡みます。

しかし、それより早く、「博多小女郎」は、西鶴の『好色一代男』(天和2(1682)年刊)や、『男色大鑑』(貞享4(1687)年刊)に登場します。詳しくは次回に続きます。(関西学院大学文学部文学言語学教授)

カルチャー・ショック話多い九州